

ピリピ人への手紙

1章の復習

前回のピリピ人への手紙の概要と1章の学びで、この手紙がパウロがローマで投獄中に書かれたにもかかわらず、喜び”joy, rejoice”という言葉が14回も繰り返されており、「喜び」がテーマであることを見ました。パウロが投獄中であるにもかかわらず喜んでいたように、私たちクリスチャンにも、外側の状況に左右されるこの世の幸せ”happiness”ではなく、どんな状況でも左右されない「イエス・キリストにある喜び」があります。

前回の1章では、喜びの理由を4つ見ました。

Q. その(1)は、6節の真理です。何でしたか？

(イニシエイトしてくださった神ご自身が、私たちを神に似た者へと完成してくださる。)

Q. その(2)は、12～18節から見られる真理でした。何でしたか？

(この世的には私たちに反することが起こっているように思えても、神は全てをコントロールしておられ、ご自身の良い目的に従って益としてくださり、主の福音と救いが広がるように、私たちの人生を用いてくださる。)

Q. その(3)は、21節の宣言に見られる真理でした。何でしたか？

(キリストのために生きているなら、死ぬことは益”gain”であると確信できる。)

Q. その(4)は、29節の真理でした。何でしたか？

(キリストのための苦しみにあずかれる特権＝私たちの永遠の益につながる)

2章

1～11：イエスの模範に従う奨励と、その時に得られる喜び

1～2節：一致の喜び

「こういうわけですから”Therefore”」＝1章で言ってきたこと

パウロの投獄によって、かえって福音と救いが広がり、ピリピの教会の信者も霊的戦いや迫害の中でも恐れることなく、かえってキリストゆえの信仰だけでなく苦しみに預かっていると確信でき、イエス・キリストにあって喜べること。

＝キリストにある喜び(その5)

一致の喜び＝聖霊の喜び

“like minded”＝この同じ思い、同じ考え方があれば、「キリストにある励まし、愛の慰め、御霊の交わり、愛情とあわれみ」があるはずで、一致するはず。

“having the same love”＝同じ、イエス・キリストにあるアガペの愛を持つはず。

＝第一ヨハネ5：1、2

“one accord”

“one mind”

クリスチャンの交わり”fellowship”と、この世のソーシャルな集まりとの違い

本当にボーンアゲインしたクリスチャンとは、初対面でも家族のように感じるし、交わっていると聖霊の一致があって、霊が喜ぶ。嬉しくて楽しい！霊の一致があってクリスチャンが集まっている時、主がそこにおられるから。❤️=詩篇133

3~4節：一致の喜びに必要なのは、"lowliness in mind"="humility"

自己中心"self-centeredness"と虚栄（プライド）"selfish ambition, pride, vain-glorious attitude" = 分裂を生み出す。

一致には、自己中心と虚栄の正反対

=人のことが先、自分は後、へりくだり"lowliness in mind"="humility"（*この後の5節で説明）

=ローマ12：10、16

クリスチャンの一致の大切さ=エペソ4：1~6

5~8節：イエスの模範

5節の「心構え」は"mind"=Way of Thinking=*3節の"humility"

"humility"="being under/accepting the condition/situation which you can't accept, or which is difficult to be in"

！！神が人間になることを考えてください！！

神が人間になることは、私たち人間が弱々しく汚らわしいうじ虫になることよりもずっと比べものにならないことです。

7節の「仕える者」は英語では"bondservant", ギリシャ語の"doulos"

=主は、御子なるイエスが天なる神に従う喜び（三位一体の完全なる一致の喜び）から、また、私たちを愛して自分を捧げた結果として得られる喜び（私たちをこの世から救い、ご自身の花嫁として天に迎え、永遠に一致して交わる喜び=ヘブル12：2）から、神としてのご自身の性質を脱ぎ、人となってくださり、最もむごたらしく屈辱的な十字架の死を通過くださった。これが、私たちの1番の見本。

喜び"joy"とは、結局のところ、フォーカスの順番=JOY=Jesus, Others, You

イエスを一番に見ること。すると、聖霊が周りでミニスターすべき人たちを見せてくださり、遣わしてくださる。そして、自分は一番最後。その時に、喜びがある。

この反対に、自分を一番先にすると、他の人が自分に無いもの（物質、健康、人間関係（もしくは反対に、他人には無い苦難や病など）を持っている（もしくは持っていない）のが目に見え、自己憐憫に陥って鬱になる。"poor me"と"depress"する。=喜び"joy"の反対

9~11節：イエスは神であり、主である！

人は皆、神の前にひざまずき、「イエス・キリストは主である」と告白することになる。

この地上の人生で、自分から喜んで主の前にひざまずいて告白するか、それとも、この地上の人生が終わった後の神の裁きの前で、強制的にひざまずかされ、屈辱と苦味の中で告白することになるのか、どちらか一方。

=イザヤ45：22~24

12~18：従順に信仰に歩み、世の光、証となる=聖霊の喜び

12節：

恐れおののいて救いを達成する”work out your own salvation with fear and trembling”

この節は「救い」が「行い」によって得られると言っているのではありません。

= [エペソ 2 : 8、9](#) で確認しましょう。

救いは行いではないが、救われてからは聖霊に従った行い＝「従順であること」が求められる。

恐れおののいて”with fear and trembling”

13節：

私たちのうちに働いて、思い、志”will”を与えてくださるのも神ご自身（聖霊による思い、願い）、神のみこころ、神に喜ばれる行いをさせてくださるのも神ご自身（聖霊の力）

= [エペソ 2 : 10](#)、[ヘブル 13 : 21](#) *（*英語NKJVで読むと良い!）

よく、こう言われてきました。“Believers are to work out what God has worked in.”

= 「信者たちは、神が自分たちの内に成し遂げてくださったことを、自ら実践していかなければならない。」

恐れおののいて聖霊の働きに従順であること

= [詩篇 2 : 11](#) “Serve the LORD with fear, and rejoice with trembling”

14節：

・ ぶつぶつ文句を言ったりつぶやくな”Do Not Complain”

・ 反対したり疑ったりして紛争するな”Do Not Dispute(=useless, ill-natured arguing, debating and questioning”

Q. クリスマスが不平を言ったり、無意味な議論で言い争ったりしたら、この世にどんな影響を与えるでしょうか？

15～16a節：

曲がった邪悪な世の中で、非難されることのない純真な者、傷のない神の子供となり、いのちのこばをしっかりと握り、世の光として輝く

16b～18節：

“I may rejoice in the day of Christ that I have not run in vain or labored in vain”

= 「自分の努力したことが無駄ではなく、苦勞したことも無駄ではなかったことを、キリストの日に喜ぶことができる」

= ピリピ教会はパウロにとって信仰の子供たち。ピリピでイエス・キリストの福音を述べ伝え、たために迫害されたパウロにとって、同じように、すでに信仰ゆえに試練や迫害を経験しているピリピの信者たち、信仰の子供たちが、主にあって歩み、堅く立っているのを見るのは喜び。ピリピ教会の信仰がさらに強められるために、たとえ殉教したとしても喜ぶ。

初代教会のクリスマンたちはみな殉教（[黙示録 2 : 8～11](#)）

イエス・キリストにある喜びの理由（その6）

・ 信仰の子供達が主にあって歩んでいることを見ること。（[第三ヨハネ4節](#)）

・ 迫害の中で強く立っているクリスマンの証を見聞きすること。

この逆は、悲しみ。

19～24：テモテの模範

パウロにとって霊の子供であるテモテ

=使徒16：1～3、第一コリント4：17

20節：パウロと同じ心=イエス・キリストのことを求める=ピリピ1：20、21a

真実にピリピの信者たちを心配している”sincerely care”

21節：自己中心 vs 神（主イエス・キリスト）中心

Q. 自分はどうでしょうか？

25～30：エパフロデトの模範

・パウロの兄弟、同労者、戦友

=クリスチャンは神の家族である兄弟姉妹であり、福音のために協力して働く同労者であり、霊の戦いを共に戦う戦友です。

・ピリピ教会の使者”messenger”

・パウロの必要に応じて仕えた”ministered to my need”

・ピリピの信者たちを慕っている”long for you”

・キリストの働きのために、ピリピ教会がパウロに仕えることができなかった分を果たそうと仕え、命の危険を犯して死にそうになった。

=多くの聖書学者たちは、ピリピ教会の信者たちは、ローマにいるパウロを直接助けることが距離的に離れていて無理だったので、エパフロデトを使者として送ったと考えています。

・死ぬほどの病気になったが、癒やされた。

=パウロにとって、悲しみに悲しみが重ならないようにとの神のあわれみ

=ピリピ教会の信者もエパフロデトの癒しを祈っていて、癒やされたエパフロデトに再会できたことは喜びだったでしょう。

Q. エパフロデトはあなたにとってどのような見本ですか？

♪ Holy Forever ♪